

16世紀におけるガレノス解剖学の受容の多様性

澤井 直

順天堂大学医学部 解剖学・生体構造科学講座

16世紀西欧の解剖学者は当時入手可能になったばかりのガレノスのギリシア語原典及びそのラテン語訳に記載された解剖学的知見に強い関心を持った。アンドレアス・ヴェサリウス(1514-1564)は、一般にはそのガレノスの影響を脱し、実地の解剖による新たな知見の提示者とされてきた。しかし、近年ではヴェサリウスとガレノスの共通性が注目され、人体解剖の実施の困難さのためにガレノスでは十分に行えなかった人体構造の理解が、ヴェサリウスによって実際に人体解剖を行うことで実現されたという評価もある。

このようにヴェサリウスとガレノスの関係性についての評価が変化するに伴い、16世紀においてガレノスの解剖学がどのように扱われてきたかという問題についても再評価が必要になってきている。

今回は、ガレノスを擁護しヴェサリウスを批判したという点でヴェサリウスの先進性の引き立て役とされてきたイェコブス・シルヴィウス(1478-1555)、ヴェサリウス、ヴェサリウスの後にパドヴァ大学で解剖学を教えたガブリエレ・ファロッピオ(1523-1562)の3者による骨についての記述を取り上げる。シルヴィウスは1555年に、ファロッピオは1570年に共にガレノスの『骨について初心者のために』(De ossibus ad tyrones)についての注釈書を書いている。またヴェサリウスの『人体構造論』(1543)の第1巻は、その章構成がガレノスの『骨について初心者のために』と一致し、本文においても再三再四ガレノスへの言及を行っているため、ヴェサリウスによるガレノスの注釈書の一種としてみなすことができる。

比較の結果、3者はガレノスとは異なる観察結果を持っていたが、それぞれの仕方でもガレノスを利用して、人体構造のより精緻な理解を求めていたことが分かった。

ヴェサリウスは骨の性質や骨に一般的に見られる凹凸や関節を構成する部分の名称や特徴についてはガレノスの見解を引き継いでいる。つまり骨を扱うための道具立ては同一であり、それをを用いることによって実際に観察された構造を記している。この姿勢はシルヴィウスとファロッピオにも共通している。

骨の観察結果についてはガレノスとヴェサリウスの間には不一致があった。例えば、ガレノスが記載した切歯骨をヴェサリウスは人体にはないと主張し、イヌやサルにおいては切歯骨が見られることから、ガレノスの記述は人体の観察に基づかないことを明らかにしている。他には胸骨を構成する骨についてはガレノスが7個、ヴェサリウスが3個であり、その齟齬はやはり観察対象の動物の違いに求められている。ヴェサリウスはガレノスの誤りをその原因から逐一説明することで、ガレノスの知見から人体についての正しい理解へ導こうとしている。

シルヴィウスはガレノスに盲従していると言われることが多いが、実際には人体の観察を行い、ガレノスによる記述との齟齬を認識していた。例えば、ガレノスが切歯骨に関して述べている箇所についてシルヴィウスは何ら注釈を加えていない。前後の記述から推測すればシルヴィウスは切歯骨が存在しないと考えていた。胸骨の数に関しても、シルヴィウスの観察では3個が多いとされ、7個は非常に稀であるとしている。シルヴィウスはガレノスの記述と実際の観察との齟齬の原因を人体自体の変化に求め、若干の変化はあってもガレノスの解剖学・生理学の記述が今なお有用であることが前提とされている。

ファロッピオは切歯骨や胸骨の数についてガレノスに与しはしないが、その他のガレノスの記述をも否定はしない。動物を含む実地の観察と照らし合わせ、またガレノスの他の著作の記述を援用し、可能な限りガレノスの記述に整合性を持たせるように注釈をつけ、ガレノスをヴェサリウスよりも後の時点でも読む価値があるものと捉えていたのである。